

い。それは、他のすべてのことの「はじまり」と同じ。でも女性の政界進出は歴史の必然であり、失敗ぐらいで後もどりすることはありえない。

私の「生まれてはじめて」の政界進出も大きな歴史の一コマだったのかもしれない。

# 「はじまり」について――書の世界から

小川清実

まつ白な紙に、筆に墨を含ませて、一気に書き上げる、その一筆目は、まさに「はじめり」である。このはじめの一筆を紙におくまでに、実は用意しておかなければならぬことが様々ある。

により、異なるだろう。硯や墨、筆や紙は、ひとつひとつ、奥義を極めようとしてもキリがないものである。どれもが価格がある、ないようなものだ。結局は自分が道具に使われずに、使えるものでなければならない。だいじなのは、作品をどのようなものに仕上げたいかによって、筆も紙も墨も考えなければならぬ

そして、そのそもそのはじまりは、二月の職員室にかかる一本の電話だった。そんな気のするところである。

(東京都議会議員)

ことである。

筆

どのような筆で書くのかは、作品に大きい影響を与える。たいていは馬や豚の毛からできた筆だが、羊毛の筆はやわらかく、人の赤ちゃんの産毛でつくられた筆はさらにやわらかい。やわらかい筆は、なかなか使いうのが難しい。やわらかい筆は、異なった味わいがあることがあるが、やはり無理をせず、普段つかいの筆で書くことになる。

紙

様々なタイプの和紙の中から、自分がつくろうとする作品にもつともふさわしいものをえらぶ。墨をたっぷりと吸いやすい和紙にするか、ほとんど吸わないものにするか、あるいは、筆のすべり具合がよいものにするか、筆が紙に引つ掛かるような具合の紙にするかなどを考えてえらぶ。

墨

この墨の用意が、直接的で、最も基本的なものであ  
る。なぜなら、一枚の紙を書き上げるのに、必要な  
墨の量をたっぷりと用意しなければならないのだから  
ら。大きな作品を仕上げるときには、相当な量の墨汁  
が必要である。どのように用意するかといふと、とに  
かく、時間のある限り、墨をする作業を続ける。墨を  
すりながら、作品をどのように仕上げていくのかを、  
はいなが、一枚の紙に字をどのように置くのかを、  
墨をすりながらイメージしているのである。筆の運び  
具合いや、筆の速度などをイメージしながら、墨をす

ある程度の濃さの墨汁がたまつたら、これをガラスびんのような、別の容器にあけておく。こうして、墨汁を常に用意しておく。夏には、墨汁は腐ることがあるので、冷蔵庫に入れておいておく。この墨汁を書く

たびにつかうのである。書けば書くほど、墨汁は減つていくので、時間のある限り、墨をすり、墨汁を用意しておかなければならない。

筆も、紙も、墨汁も、すべて用意が済むと、いよいよ、書くことになる。

ここで「いい字を書こう」とか、「いい作品をつくろう」とか、「今度は入選をネラウゾ」などのような、欲が出てくるのが普通である。だから、たいていは、まず、そのように思って書く。しかしながら、これでいい作品になるかというと、そうはないのが常なのである。「これはいい」と、自分で思った作品は、他の人々から見ると、技巧的であったりして、真

にいい作品になつていなかつたことが多く、私の師は、決して、私自身がいいと思って書いた作品を選ぼうとはしない。自分自身が、いつ、書いたのか、わからないうまう。ような作品の中からこそ、師は、最もいい作品として選ばれる。これは、たぶん、全く気負わないので、平静

な気持ちでいたときに書いた作品こそが、他の人々に「いい」と認められるのだろう。

「これはとてもきびしいことだ」とさあ頑張るぞ」と張り切つたら、いい作品には仕上がらないのだから。同じような心持ちで、何十枚書いても、やはりいい作品はうまれない。常に書ける状態にしておき、一日のうちでも、様々な心持ちで書いてみる。朝、起きて、すぐに書く。食事をしてからまた書く。あるいは掃除をしてから書く。外出して帰ってきてから書いてみる。こうして、書くことが、日常の中につかって、溶けこんだときに書かれたものが、私自身の持っている力のすべてを出すことができる作品となるのだと思う。

筆を持って、新しい紙に向かうときには、「はじまり」なのではなく、日常の中の一コマとして、じく自然体でいくことが、だいじなことのようだ。「書」をすることだが、特別なことなのではなく、無理のない、素直な姿勢で向かうことが必要なのである。過剰に意

識したり、頑張ろうと、張り切りすぎたりしていいのは、途中で息切れしたりして、続いていかない。一枚の紙に向かって、筆をもって対面したときには、それまでの不斷の努力の結果などはすべて忘れ去り、無欲に、静かに、そして全身の神経を集中して、取り組んでいくことによって、その人のもつているパワーが噴き出していく。自分が日常の中できちんと仕事を、素直に、力まずに、一瞬一瞬の行為の中に發揮するかどうかがよい作品を創り出す条件といえるだろう。そのような時には、書き手は、筆と紙と墨のつくり出す質の世界に自分を投入させ、自ら筆の動くままに表現がなされる。そこに「はじまり」があるのである。

言い換えれば、常に「はじまり」はあるのである。今が「はじまり」、一瞬一瞬のすべてが「はじまり」ともいえる。反対に「おわり」はない。ある作品を、期限によつて、一応終わらなければならないとしている。それで、「おわり」ではない。また新しい「はじまり」もある。

「書」の世界は、一瞬一瞬の時間性にかかる表現の分野である。その意味で、まさに子育てと同じなのではないだろうか。子育てのはじまりはいつなのか。赤ちゃんが産まれたときなのか、あるいは、赤ちゃんが母親の胎内にいることがわかつた時なのか、あるいは結婚したときなのか、あるいは結婚しようと決心したときなのか、あるいはそれ以前なのか、すなわち、「いつ」が「はじまり」とはかんたんに言えることではないようだ。ということは、いつでもが「はじまり」といえるのではないかだろうか。

不斷の努力の中で、気張らずに、無理をせずに、一瞬の「はじまり」を受け入れていくことこそ、自身がもつている力が、総合的に発揮することができるのだ。

(埼玉純真女子短期大学)